

2023年10月の読書案内

ステージ4の緩和ケア医が実践する 「がんを悪化させない試み」：山崎 章郎（やまざき ふみお）

1947年生まれ、福島県出身。緩和ケア医。75年千葉大学医学部卒業、同大学病院第一外科、国保八日市場（現・匝瑳）市民病院消化器科医長を経て、91年聖ヨハネ会桜町病院ホスピス科部長。97年～2022年3月まで聖ヨハネホスピスケア研究所所長を兼任。2005年在宅診療専門診療所（現・在宅療養支援診療所）ケアタウン小平クリニックを開設したが、体調のこともあり、2022年6月1日より、同クリニックは医療法人社団悠翔会に継承され、現在は同クリニック名誉院長として、非常勤で訪問診療に従事している。

2022年12月半ばから、日本財団の支援を受けて、東京都小金井市の聖ヨハネ会桜町病院に「がん共存療法」の臨床試験プロジェクトチームが立ち上がった。（手術後の大腸がんで、肺や肝臓に転移のあるステージ4の患者さんのうち、抗がん剤治療の現状や、自分の生き方や価値観から抗がん剤治療は選択したくない患者さんを対象にした「がん共存療法」の臨床試験を始めることになった。）

これまでの「がん」になった医師の取り組みと異なるところは、高齢者に対する現状の治療法の活用ではなく、生活の質を維持する治療法を自らその効果を試して、さらに臨床試験を通して、保険適用の標準治療として国に認めてもらうという、新たな治療法を確立しようと考えたところにある。

【ステージ4の大腸がんが判明】

2018年夏進行の大腸がんが判明し、腹腔鏡手術をし、抗がん剤の服用治療開始したが副作用に苦しむ。

6ヶ月後肺に転移し、ステージ4へ。抗がん剤は効果がなかった。自分らしく生きる時間を大切にするため抗がん剤の治療を選択しないこととした。

【「がん共存療法」の着想】

抗がん剤治療を選択したくないステージ4の患者さんに、可能な限り「がんの増殖を制御」し「無増悪生存期間」（無増悪生存期間（PFS）とは、治療中（治療後）にがんが進行せず安定した状態である期間のこと）の延長を目指す取り組みとし、その治療法を「がん共存療法」とした。

《がん共存治療法の前提》

- ① 論理的であること
- ② 副作用が少ないこと
- ③ より多くの患者さんが受けられるような方法であること
- ④ 医師であれば誰にでもできること
- ⑤ どこでもできること
- ⑥ 臨床試験を目指すこと

これらを前提とし、自らがステージ4のがん患者であることから、自身で「がん共存療法」に取組み、成果を検証することができた。

【「がん共存療法」の基本形】

様々な、がん共存療法を自らに試した結果、効果が期待できる基本形を完成した。

- ① MDE糖質制限ケトン食 を中核に
- ② クエン酸療法
- ③ 少量抗がん剤治療 （場合により、プラス「丸山ワクチン」も考慮）

* 「福田式がんを遠ざけるケトン食レシピ」（福田一典他）が大変参考になる。

【挫折と拾う神あり】

「がん共存療法」の研究に取り組もうとした矢先、以前からの虫垂炎悪化による腹膜炎手術による回復の遅れや医師不足等、現在のケアタウン小平クリニックの運営が立ち行かなくなり、八方ふさがりとなった。

そんな時、以前からがん治療に対する考え方を同じくし、「がん共存療法」を理解していただいた、医療法人悠翔会理事長の佐々木淳先生に事情を話し、クリニックの理念を理解していただき承継していただくこととなった。クリニックの医師、事務員、支援スタッフ等に説明しクリニックを継続することができた。

クリニックの閉鎖と当初の理念をあきらめかかっていたところに、拾う神が現れたと思った。

自らは、クリニックの非常勤医師として、訪問看護を継続することとし、「がん共存療法研究所」準備室を立ち上げるために力を注ぐこととした。